

## 【生活科】教科提案

### 「自立をめざして」

～主体的に活動・体験し、自分自身への気づきをはぐくむ生活科～

#### 1. 研究テーマ設定の理由

##### (1) 学校提案とかかわって

学校提案では【学びをデザインする】ことを学ぶ筋道を考えて課題解決に向かうとしている。そこで今年度、生活科部は「まず学ぶ筋道を明確に認識し、それらを次の課題に活かし解決に向かおうとする」と考えた。それは子どもたち一人一人が問題解決に至った過程や新しい疑問はどのようにして生まれたのかを認識できることが「学びをデザインする」ことにつながると考えるからである。

子どもたちの生活はいつも多くの「なぜ」にあふれている。この思いは分かりやすく表出することもあれば、そうでないこともある。同時に「なぜ」が「なるほど」に変わった過程がはっきり認識できないということもある。これは発達の段階から考えて、子どもたちにとっては当たり前のことであろう。だから「どうして分かったの？」と問いかけても、「(どうして分かったかは) 分からない、だけど分かった」と答えることが多い。「なぜ」が「なるほど」に変わったときの子どもたちはとてもうれしそうである。要するに、子どもたちにとっては、「なるほど」が大切で楽しくて、その過程はさほど重要ではないのだろうと考えている。

しかし、この過程の中で子どもたちは多くの学びを生み出している。今までの生活経験・体験を想起して考えること、友だちといっしょに話しながら思いをまとめていくこと、実際に試してみること、自分たち以外の人に尋ねてみることなど、様々な過程を経て、「なるほど」に変えているからである。また「なるほど」は一度で終わりではない。次の「なぜ」「どうして」を生み出していくのである。「なるほど」・・・、「ではこれはどうして?」「なぜこれはちがうの?」と思いが終わることなく続くことで、学びが深まったり、広がったりしていく。このように「なぜ」から「なるほど」への繰り返しが“ひと・もの・こと”のもつ真理や価値に近づいていくのである。

このことから、子どもたちが主体的に活動・体験し、その中での気づきを表現したり、気づきをもとに考えたりすることで、知的な気づきを子どもが自覚し、実感的に分かることを重視したい。そしてともに学び合う中で、集団における自分の存在や自分のよさや成長に気付いたりすること、つまり「自分自身への気づき」ができるようにしたい。そこで、生活科の研究テーマを「主体的に活動・体験し、自分自身への気づきをはぐくむ生活科」とした。

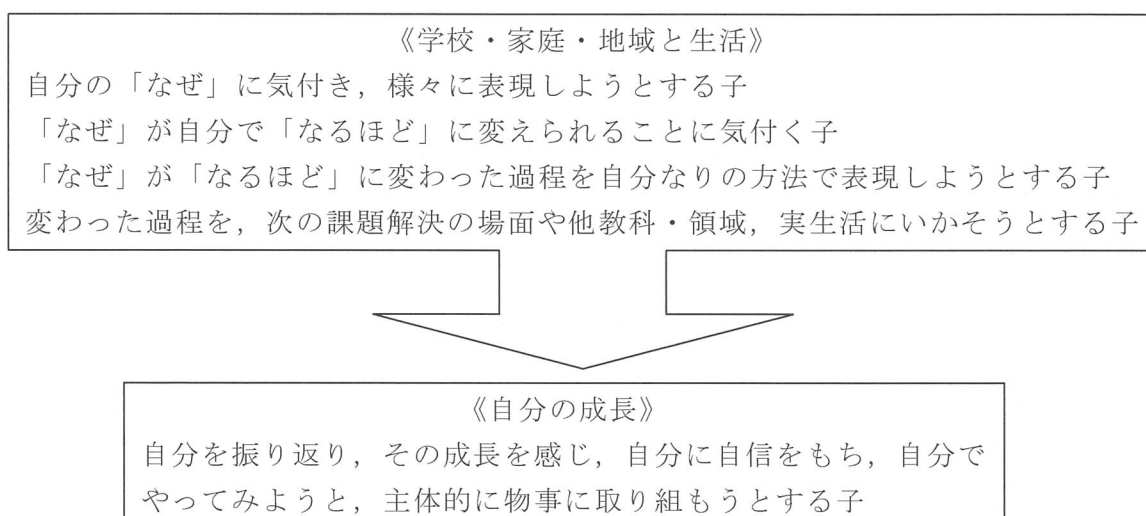
また、子どもたちはたくさんの「なぜ」をもっているのに、「今、ふしぎに思っていることある?」と聞かれると「ない」と答えることが多い。これは、子どもたちが今を生きているからであろうと考える。見るもの・触れるもの、体験したことなどその時に思いがあふれるのだろう。思いがあってもそれに気付いていないこともある。また、「なるほど」に至る前に、新たな「なぜ」が次から次へと現れてきて、はじめの「なぜ」は消えていくのかもしれない。だから、いざ不思議に思っていることを聞かれても答えられないのである。

う。

しかし、このような中で「なぜ」の思いが強くなり、「なるほど」に変えたい、変わったということがある。それは実際に何度も何度も見るもの、体験すること、してきたことであると考えている。日々の生活で一度きりでなく、よく見る、よく出会う、よくかかわる“ひと・もの・こと”には強い思いを抱いていると考える。このことから、子どもたちにかかわりの深い“ひと・もの・こと”に対して持っている主体的な「なぜ」を大切にして繰り返し学習活動に取り上げていきたい。

そして、逆にかかわりすぎて思いがもちにくい当たり前のことに対しても、教師が繰り返しきっかけづくりをしながら、様々なことに気付きが生まれるようにしたい。そのようにして、気付く喜びを積み重ねていくことが自分の成長を実感することにつながると考えている。

## （２）生活科でめざす子ども像



## 2. 生活科学習における「学びをデザインする子どもたち」

### （１）生活科における学びをデザインする子どもの姿

課題解決	<ul style="list-style-type: none"><li>・不思議に思うことや知りたいことを見付けてくる</li><li>・不思議に思うことや知りたいことを解決するために、どうすればよいか考え、試していこうとする</li><li>・上記の学習活動を他者（教師・友だちなど）といっしょに取り組むことができる</li><li>・今までの学び方をいかして、課題にあった解決方法を自分なりに考えて、選択し、見通しをもって学習しようとする</li></ul>
対話	<ul style="list-style-type: none"><li>・対象にじっくりと向き合い、気付きをもつことができる</li><li>・友だちの様々な気付きや考えに触れることにより、同じところや違うところを見つけることができる</li><li>・“ひと・もの・こと”にかかわる学習活動を通して、単一的に見ていた“ひと・もの・こと”に対して別の見方もあると気付くことができる</li><li>・家族・地域の人々など自分にかかわる様々な“ひと”の思い・願いなどに触れるこ</li></ul>

	とで、自分に新たな考えが生まれたと感ずることができ
学 び 方	<ul style="list-style-type: none"> <li>・他者と学習活動を進める中で気付いた学び方を自分の課題と比</li> <li>・学習活動の中で、気付いたことをだれかに知らせたい・伝えたいという「相手意識」をもって取り組もうとしている</li> <li>・気付いたことを絵や文、作品などに表現し、まわりの“ひと”に広げようとする</li> </ul>
<p>＊教科目標・学年目標が学習指導要領では、第1学年及び第2学年を通してのものと設定している。上記の図も2カ年を考えて設定しているが、全く同じものとしてとらえているわけではない。単元目標や様々な場面で、教師は学年の違いを考慮して目標やねらいをたてていくこととする。</p>	

## （２）生活科における子どものみとりと支援

行動観察・発言・つぶやき・ワークシート・作品などでみとっていく。子どもの様子や表現に共感しながら、意味づけ・価値づけをしたり、後押ししたりして、一人一人の学びの様相に沿った支援をしていく。交流する場では、活動を想起させる問いかけや子どもと子どもをつなぐ問いかけをして学びを深めていく。

そしてみとりと支援がその子どもにとってどのような意味があったか。どのような励ましになったかという教師の振り返りも同時に行っていきたい。

## （３）実践例

2年生「おしろの動物園～もっと見つけたいねまちのわくわく～」

グループそれぞれのブースで動物ガイドのリハーサルをしたあとのふりかえりの場面

T：今日のキラキラは見つかりましたか？

C1：発表の時、Sさんが暗唱していて、とても良かったです。

C2：M君です。同じグループのM君は言葉につまりながらも、頑張ってお話をしました。

C3：ツキノワグマグループさんがベニーちゃんのつめのことを教えてくれて、おもしろかったです。

T：へえ～。みんなもつめの話きいた？

（聞けていない子どもが多かったので、C5とC6に再びみんなの前でガイドをさせた。）

C4：獣医さんが麻酔をかけてつめを切ると言ったけれど、どうやって麻酔をうつのか？

C5とC6：分からない。

T：分からない時は、どうする？

C：M先生が見に来てくれているからきいてみようよ。

### C4の授業のふり振り返りカード 自分自身への気づき

麻酔銃を使います。距離をたもって世話しているのですよ。ペットとはちがいますね。



私はグーでちょびっと手をあげました。先生を手で『おいでおいで』と呼びました。そして前からずっと思っていたことを言いました。『クマにどうやって麻酔をうつのか？』と。先生は私が「言えない」と言ったのに「みんなの前で言って」と言いました。みんなは私の話をきいて「そうだね。」と考えてくれました。（中略）みんな分からなさそうな疑問をつくったので、私は自分がものすごくキラキラでいいと思います。

### 3. 研究の展望

研究は2つのことから進めていきたいと考えている。

1つ目は、子どもたちを深くみとり、学習活動をすすめていくことである。みとる方法は授業中の発言・行動記録・ワークシート・具体的な表出物などがあげられる。あわせて、休み時間の子どもたちの気付きや朝の会・帰りの会でのニュース発表などやまた生活科・他教科以外での発言・気付きも丁寧にみとっていく必要があると考える。そしてみとったものを詳細にまとめていく。これらは教師のみとりが深まるだけでなく、子どもたちが、自分はどのように変容したかを実感する大きな手立てとなる。

そして、このみとりから子どもたちが主体性をもって学習に取り組むことができるように課題※は、子どもたちのつぶやき・思い・願いから出たものを主に設定していくことと考えている。※学習指導要領の内容や教材の持つ価値を含んでいることが前提である。

また主体的に学習活動に取り組むために、課題設定までの体験や学習活動、また課題解決のためのそれらを繰り返し行うことも必要である。これは、一人一人が“ひと・もの・こと・ひと”に繰り返しかわることで、今まで気付かなかったことに気付く、そして気付きを深めることで、一度だけの体験や活動だけで終わらないことにつながっていく。そして、繰り返すことで学習活動に「見通し」をもつことができると考えるからである。

2つ目として、生活科を中心とした各教科・領域と関連付けた年間学習指導計画を行うていくことである。学習指導要領では主に国語・図工・音楽などの他教科との関連や合科学習を積極的に行うこととしている。しかし、低学年の子どもたちは、発達の段階を考慮して、すべての教科・領域を関連付けて進めていくことが望ましいと考える。なぜなら、低学年の子どもたちは学校生活で起こるすべてのことが学習経験・体験とつながっていくと推察されるからである。生活科だけで“学びをデザインする子どもたち”をめざすのではなく、すべての教科・領域とかわり合いながら、進めていけるように教師はねらいをもって年間学習指導計画を立てていくことでより気付きを深めることのできる手立てになると考える。

### 4. 研究の評価について

子どもたちが主体的に見通しをもって学習活動に取り組んでいるかを知るために、教師は様々な表現方法を子どもたちに提示していく。絵を描くこと、ものづくりをすること、記号化、色での表現、これらの組み合わせ、様々な表現活動から子どもたちの思いを知ること、見通しをもっているかを探る。また自分の思い・考えがどのように変化していくか、してきたか連続性のある掲示を行い可視化していく。また、思い・願いを十分に表現しにくい場合には、写真やビデオにとって記録しておく。

行動観察は重要であるため、毎時間記録していく。そして、学校生活だけのみとりではなく、家庭生活の様子、保護者の思いなど子どもたちの今までの重要な生活経験なども考慮して支援の手だてとしていきたいと考える。また、生活科で得た学び方が、他教科・領域であらわれているか、またその逆もノート・ワークシート・日記など様々な表出物で見えていく。

〈引用・参考文献〉 文部科学省（2008）「小学校学習指導要領解説生活編」

和歌山大学教育学部附属小学校（2012）領域提案 生活科／高浦 勝義・佐々井利夫（2009）「生活科の理論」黎明書房／高浦 勝義・佐々井利夫（2009）「生活科の授業づくりと評価」黎明書房  
秋田喜代美・編「教師の言葉とコミュニケーション～教師の言葉から授業の質を高めるために～」教育開発研究所